

## 情熱は後輩に伝わったか

### 第25期 桑原耕二

私達25期が1年で入部した当時、23期佐々木キャプテンを中心としたチームは相当な実力があり、当然1年が試合に出場できる確率は低くウイングで樽本が使われた位でした。23期が昭和41年秋に引退した後は24期新井キャプテンを中心としたチームになりました。しかし部員数が15人ギリギリだったためこの頃よりクラブは大変苦しい状況になってゆきます。それでも何とか新人戦を戦い、春の関東大会予選にはそれなりの戦力になっていたと記憶しています。しかし残念ながらこの時点で3年生が引退することになりクラブは増々苦しい状況になってしまいます。この時より約1年半の間私はキャプテンを務める事になり、同期には河野次郎 (FW バイスキャプテン)、矢島代一 (FW)、地形峯夫 (FW)、樽本章 (BS)、巻田豊 (BS) がおりました。新しいチームは、我々2年生とてラグビーの経験は1年ちょっとですし、1つ下の26期はまだラグビーを始めたばかりですから、まず試合ができる状態ではありません。夏合宿まではひたすら基礎練習を繰り返すしかありませんでした。夏合宿は1年の時と同じ宇都宮で行いました。この時の合宿は1年の時の印象が強いためか記憶が薄く、練習も合宿にしてはかなり楽だったように思います。秋のシーズンになり、何とか試合ができる状態になりましたが1年2年合わせてもメンバーが足りず、サッカー部や山岳部から応援してもらってやっと試合をする様な状況でした。

当然やると負けの連続でした。どうしたら勝てるのか、どのような練習をすればよいのか、数少ないラグビー関係の本を探してきては研究し、自分達の乏しい経験の中から練習方法やフォーメーションを暗中模索する日々が続きました。

私達が初めて勝ったのは翌年 (昭和43年) の春、新人戦、対国士舘。大勝でしたのでこんなに点が取れてよいのか不思議な気持ちでした。

3年になり新1年生27期がかなりの数入部してきました。有望な人材も多く、ようやくクラブも活発になったのですがこの頃より私達3年生の中で関東大会予選を最後に退部する意見が多数を占める様になってきたのです。私自身は千歳ラグビーの伝統に対し強く責任を感じていたのと、やっとならぶ面白さがわかりかけてきた時で、何が何でも最後までやるんだと心に決めていましたので結局私だけが浮き上がった形になり、私1人がラグビーを続けることになったのです。

それからのチームは私がプレーイングコーチの様な役割で活動してゆき、私も今思うとよくあれだけのエネルギーがあったなと思うぐらいラグビーに没頭しました。部員は半数以上が1年生でしたのでチーム力は弱体でしたが練習はキッチリやりました。夏合宿はやはり宇都宮で行い、秋にはある程度の戦力になりましたが全国大会予選は2回戦で両国高校に敗退しました。

最終戦メンバーは以下の通り

1白石(1) 6青木(2) 11諸沢(1)  
2林(1) 7佐藤(2) 12谷田部(2)  
3草野(1) 8加藤(2) 13門伝(1)  
4遠藤(1) 9桑原(3) 14曾根(1)  
5 10小西(1) 15岡(2)

25期のOBはこの様な経過から私1人しかおりません。顧みると千歳ラグビーには都立高校のクラブ活動の限界を認めざるを得ない様々な環境がありました。監督やコーチのいない状況で高校生主体の部活には当然問題も起ります。精神的にも技術的にも未熟な者同志の集まりの中で何人も有望な選手をやめさせてしまったことも事実ですし、本当のラグビーの楽しさを感じる事ができるには3年はあまりにも短かすぎます。しかしながらこの様な決して良いと言えない環境の中でも千歳ラグビーの伝統がバックボーンとなり、OBの助けを借りながら相当なレベルの練習をこなしてゆけた事は私達の誇りであり、他チームにない特筆すべき特徴だった事も確かでしょう。

残念ながら25期の戦績は決して自慢のできるものではありません。しかしラグビーに対する情熱は他のどの期にも優るとも劣らなかつたと今でも自負しておりますし、その情熱は26期以降の後輩にも十分伝わったと信じております。